阪神・淡路大震災にみる家具転倒の状況

「家具が倒れると逃げ道まで塞がれて恐いね」

平成7年1月17日午前5時46分、兵庫県南部を襲った直下型地震は、マグニチュード7.2、震度7を記録、死者行方不明者は6千人を超えました。

また、負傷者は4万3千人を数え、そのなかには建物に特別な被害がないにもかかわらず、家具の転倒や散乱によって、逃げ遅れたり室内でケガを負った方も多数含まれています。これは、室内に家具や電化製品などを多く置くようになった近年の住宅事情によると思われます。

約6割の部屋で家具が転倒、散乱した

この阪神・淡路大震災における震度7の地域では、住宅の全半壊をまぬがれたにもかかわらず、全体の約6割の部屋で家具が転倒し、部屋全体に散乱したというデータがあります。[※1]

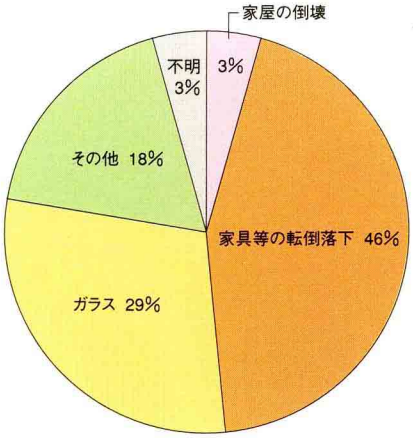
しかも、ただ倒れるだけでなく、食器棚などは扉が開いて中の食器類が散乱し、また、冷蔵庫やピアノは移動してしまいテレビや電子レンジが飛ぶといった、日常では考えられない現象も確認されています。

つまり建物が無事でも、家具が転倒するとその下敷きになってケガをしたり、室内が散乱状態のために延焼火災から避難が遅れてしまうなど、居住者被害も大きくなるというわけです。

※1 日本建築学会「阪神淡路大震災　住宅内部被害調査報告書」

■内部被害による怪我の原因

調査数　130人

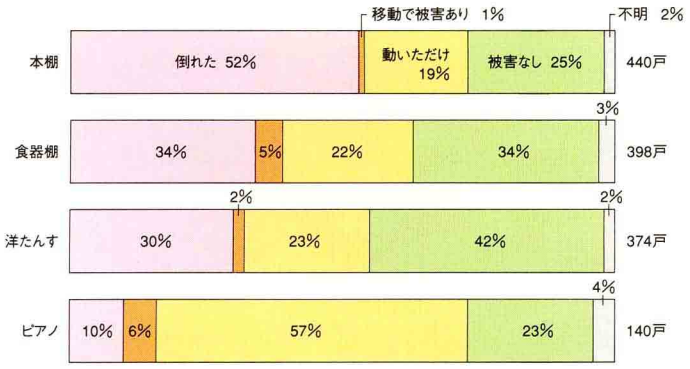


写真提供：大阪市立大学北浦研究室

多くの住宅で食器棚や冷蔵庫が倒れ、扉が開いて中のものが散乱。食器などの破片で室内が危険な状態となった

■主な家具の被害状況

「震度7の地域」と「災害救助法適用地域」



■各室の散乱状態

「震度7の地域」と「災害救助法適用地域」　343戸

グラフは日本建築学会「阪神淡路大震災　住宅内部被害調査報告書」より